

滋賀県立近代美術館蔵「近江名所図屏風」と 内海のイメージ

学習院大学大学院 人文科学研究科哲学専攻

博士後期課程 1年 茨木恵美

本発表は近江湖西の名所を描く「近江名所図屏風」(滋賀県立近代美術館蔵、16世紀後半)について、画中に描かれた場所に注目し、内海のイメージ という視点から考察を行うものである。内海のイメージ とは日本の風景を絵画化する際に、景観のフレームとして用いられた西湖図の枠組みのことであり、この 内海のイメージ を滋賀近美本成立の前提として想定したい。

近江名所の絵画化は大嘗会悠紀屏風を嚆矢とし、中世を通じてしばしばなされてきたが、遺品が確認されるようになるのは、この中世末期の滋賀県立近代美術館所蔵「近江名所図屏風」を最古とする。本屏風は画面上部を湖西の名所、中程を琵琶湖、下辺を山景(もしくは島)とし、陸地が琵琶湖を挟み込む画面構成をとるが、近江八景を主要モチーフとする他の近江名所図とは違い、湖西の名所のみを描く点に特色がある。加えて画中の名所配置が実際の位置関係とほぼ一致する、つまり地勢的であることが最大の特徴である。

中世において、湖西そして琵琶湖は歴史、文学、伝説など多様な記憶の堆積する場として認識され、そこには瀟湘八景と西湖のイメージも投影されていた。また、中世の紀行文には本屏風に描かれた名所の名が多く見られるが、このことは湖西の景観、琵琶湖の姿が当時人口に膾炙していたことを窺わせる。これを本屏風の地勢性と鑑みるなら、ここに描かれた景観は単なる名所イメージの織物ではなく、体験的知識や身体的実感を伴って観者に享受されたと考えられよう。

ところで、瀟湘八景と西湖図は日本の景観図に多大な影響を与えたが、各景の天象や時刻の推移に主眼を置く瀟湘八景に対し、西湖 = 内海 を取り囲むように名所を配する西湖図は、叙情性よりも地勢的正確さに重点を置くため、画面構成の枠組みとしてより重要な役割を果たした。室町後期以後、日本の景観図において、この西湖図の枠組み = 内海のイメージ の中に瀟湘八景モチーフを定置し、フレーミングすることによって、多くの作品が生み出された。その代表例が雪舟筆「天橋立図」(京都国立博物館蔵、15世紀後半～16世紀初頭)である。

ここで改めて「天橋立図」と「近江名所図屏風」とを見比べる時、発表者は両者に思いのほか親近性を見出す。それは両者に共通する西湖図の記憶、内海のイメージ に起因するのではないか。いずれも天橋立、近江湖西という記憶の宝庫を主題とし、名所が 内海である与謝海と阿蘇海、琵琶湖を取り囲むように描かれている。またレベルは異なるが、どちらも地勢的である点に特徴がある。つまり、「近江名所図屏風」は 内海のイメージ によって結び付けられた、「天橋立図」の遠い子孫といえるのではないだろうか。

以上のように、本発表では 内海のイメージ に注目して本屏風をとらえ直し、絵画史的図様伝統における「近江名所図屏風」の位置づけを試みたい。